

はじめに

昭和五十二年の春、関西の地に職を得たのを契機に、古筆切を集めることにした。何しろ、関西には、大阪や京都など、歴史のある古書店や骨董店が少なくないからである。ただ、古筆を集めるといっても、高野切や石山切など、平安時代の一級品はもとより高嶺の花、我らが薄給の徒に似つかわしいのは、鎌倉・室町期の二流・三流品である。ただし、二流・三流といっても、バカにしてはいけない。それはお宝品の価値が低いというだけのことで、ひとたび国文学の資料という観点に立てば、これがどうしてなかなか捨てたものではないのである。

たとえば、高野切古今集は、古今集のテキストとしては、現存最古のものではあるが、それでも、その書写年代は、古今集の成立以後、百五十年も経過しているのである。だが、一方、新勅撰集以下、鎌倉・室町期に成立した十三代集の切ともなると、作品が成立してから半世紀と隔たらない頃の書写になるものなど、数えきれないほどあるし、中には、限りなく原本に近いものとか、編者の自筆原本とおぼしきものなども交じっていたりして、これがけっこう油断ならないのである。

かように、給与生活者の経済的事情にも見合い、そのくせ資料的価値なら、天下の高野切にも見劣りしないという切を一枚、そしてまた一枚と、三十数年の長きにわたって探し求めている間に、気付いてみれば、いつしか手元には、かなりの枚数の古筆切が集まっていた。そこで、これらの古筆資料を、何とか研究者や愛好家のお役に立てる方法はないものかと思案した結果、以下のように、図版入りの廉価版で出版することを思い立ったのである。

『国文学古筆切入門』正・続・続々編（和泉書院、昭和60年～平成4年）

『平成新修古筆資料集』第一～五集（思文閣出版、平成12年～22年）

前者はこの道の先達・藤井隆氏との共著であるが、この八冊の小著は、今日国文学界や書道界そして古美術界などで、それなりに一定の役割を果たしているものと、ひそかに自負している。けれども、いまだ世に紹介されることもなく空しく篋底きやくていに埋もれている切も少なくない。そこで、これらに光を当てるべく、ここに今一冊、古筆切を紹介する本を出版することにした。名付けて『古筆の楽しみ』。読者諸氏には、文字通り楽しく読んでいただければ、幸いである。

最後に、本書が世に出るについて、恵阪友紀子・岸本理恵・北井佑実子・須藤圭・立石大樹・寺田伝・中葉芳子・日比野浩信・藤原美佳・舟見一哉の諸氏の助力を得たこと、および武蔵野書院主・前田智彦氏の厚い御理解を忝くしたことをここに記して、衷心より謝意を表する次第である。

平成二十七年 春

編著者しるす

目次

はじめに	1	冷泉為尹	四半切(後撰集)	36	
古筆切の基礎知識	8	慈円	六半切(拾遺集)	38	
勅撰集と古筆切	14	後鳥羽天皇	四半切(拾遺集)	40	
1 飛鳥井雅経	今城切(古今集)	16	二条為明	六半切(拾遺集)	42
2 藤原清輔	四半切(古今集)	18	後醍醐天皇	香具屋切(拾遺集)	44
3 寂蓮	六半切(古今集)	20	越部局	肥後切(後拾遺集)	46
4 慈円	六半切(古今集)	22	寂蓮	青木切(後拾遺集)	48
5 藤原秀能	佐伯切(古今集)	24	源通親	持明院切(後拾遺集)	50
6 後嵯峨天皇	鎌倉切(古今集)	26	清水谷実秋	龍山切(千載集)	52
7 二条為世	久巴切(古今集)	28	藤原家隆	中院切(千載集)	54
8 後京極良経	四半切(後撰集)	30	後京極良経	六半切(千載集)	56
9 民部卿局	秋篠切(後撰集)	32	寂蓮	六半切(新古今集)	58
10 津守国夏	四半切(後撰集)	34	藤原家隆	祐海切(新古今集)	60
			慈円	四半切(新古今集)	62
			九条教家	尾里切(新古今集)	64

73	藤原為家	六半切 (狭衣物語)	166
72	冷泉為相	卷物切 (源氏系図)	164
71	兼空	四半切 (河海抄)	162
70	花山院師賢	松尾切 (源氏集)	160
69	冷泉為相	四半切 (源氏物語)	158
68	阿仏尼	四半切 (源氏物語)	156
67	藤原為家	六半切 (源氏物語)	154
66	京極為兼	四半切 (伊勢物語注)	152
65	東常縁	四半切 (伊勢物語)	150
64	京極為兼	四半切 (伊勢物語)	148
	物語と古筆切	146

参考文献

.....	184
-------	-----

81	水無瀬兼成	四半切 (徒然草)	182
80	一遍	藤沢切 (一遍上人絵伝)	180
79	世尊寺経朝	卷物切 (弘法大師行状絵)	178
78	世尊寺実定	卷物切 (北野天神縁起絵)	176
77	一条冬良	四半切 (平家物語)	174
76	寂蓮	卷物切 (大鏡)	172
75	蛭川親当	四半切 (狭衣物語)	170
74	冷泉為相	六半切 (狭衣物語)	168

63	慈円	六半切 (源氏狭衣歌合)	144
62	慈円	六半切 (千五百番歌合)	142
61	藤原俊忠	二条殿切 (寛平御時中宮歌合)	140
60	冷泉為尹	四半切 (頓阿法師詠)	138
59	二条為道	西宮切 (自葉集)	136
58	藤原定家	五首切 (家良集)	134

41	寂蓮	雲紙本和漢朗詠集切	98
40	寂蓮	大坂切 (和漢朗詠集)	96
39	三条公忠	四半切 (拾遺抄)	94
38	藤原為家	四半切 (万葉集)	92
	私撰集と古筆切	90

57	慈円	卷物切 (公経集)	132
56	藤原為家	四半切 (後鳥羽院御集)	130
55	二条為氏	四半切 (壬二集)	128
54	淨弁	四半切 (拾玉集)	126
53	寂然	大富切 (具平親王御集)	124
52	慈円	烏丸殿切 (貫之集)	122

37	一条兼良	大四半切 (新統古今集)	88
36	堯孝	仏光寺切 (新統古今集)	86
35	尊円法親王	卷物切 (風雅集)	84
34	二条為親	島田切 (続千載集)	82
33	甘露寺隆長	周防切 (続千載集)	80
32	津守国冬	伊勢切 (続拾遺集)	78
31	二条為明	朝倉切 (続古今集)	76
30	津守国夏	長尾切 (続後撰集)	74
29	定為	四半切 (新勅撰集)	72
28	二条為右	豊前切 (新古今集)	70
27	二条為重	道也切 (新古今集)	68
26	後二条天皇	四半切 (新古今集)	66

	私家集と古筆切	120
51	二条為右	大四半切 (二八明題集)	118
50	小倉実名	四半切 (藤葉集)	116
49	後醍醐天皇	四半切 (新浜木綿集)	114
48	津守国冬	六半切 (続現葉集)	112
47	光厳天皇	六条切 (八代和歌抄)	110
46	二条為氏	四半切 (八代集抄)	108
45	津守国夏	四半切 (堀河百首)	106
44	後京極良経	四半切 (堀河百首)	104
43	世尊寺行尹	卷物切 (和漢朗詠集)	102
42	九条教家	山井切 (和漢朗詠集)	100

1 飛鳥井雅経 今城切(古今集)

世に飛鳥井雅経筆と伝える古筆切はその数少なくないが、その内、多くは雅経の大叔父藤原教長の手になるものであることが明らかになっている。ここに掲出した今城切もその例外ではない。

新撰古筆名葉集の飛鳥井雅経の項をひもといてみると、その筆頭に「今城切 四半古今歌二行書紙ノ四方ニ卦アリ白浅黄萌黄」とあるように、料紙には粹野を施しており、しかも白紙と染紙とを交用していることが知られる。掲出のものは藍の染紙で、大きさは縦二五・五センチ、横一四・八センチ。罫の寸法は縦が二一・四センチ、横が一二・八センチとなっている。古今集は卷十九雑体の躬恒の長歌の後半部と伊勢の長歌の詞書の部分。一行目の冒頭「ときちらし」は定家本「こきちらし」で、断簡と一致するのは雅経本・家長本・前田本など。六行目の「七条の」は定家本「七条」で、断簡と一致するのは、元永本・家長本・静嘉堂本など。

この今城切は『古筆学大成』以下、諸書に現在百葉を越す断簡が紹介されており、しかもその奥書部分を記した資料まで伝わっている。それによれば、崇徳天皇御本を治承元年(一一七七)八月に藤原教長が書写したものであることが判明する。前述のごとく流布の定家本とは異同があるのも無理はない。なお、この今城切と同筆の作品に、二荒山本後撰集・長谷切朗詠集・箔切朗詠集・伴大納言絵詞(詞書・源氏物語絵巻の竹河・橋姫巻(詞書)などがある。(田中)

ときちらし あられみたれて しもこほり
いやかたまれる にはのおもに む□□□□□□
ふゆくさの うへにふりしく しらゆきの
つもりくで あらたまの としをあまたも
すくしつるかな

七条のきさいのうせたまひにける
のちによみける 伊勢

